



皆さま、こんにちは。私は自治医科大の第一回の卒業生です。卒業後、出身地の鳥取県で地域医療に従事した後、母校に帰り、現在は地域医療の教育や研究に従事しています。卒業生を支援する役割も仰せつかつており、卒業生一人一人を見詰めて、全国へ向けて声援を送っています。現地へも赴いています。

信頼の「きずな」

さて、全国各地で医療活動をしている自治医科大の卒業生がつづつたりレーエッセー「Dr. ジチ」は、今回で最終回となりました。「Dr. ジチ」は、この二年間に全国四十七の都道府県を三巡しました。毎週、土曜日の掲載が待ち遠しく、わくわくしながら読ませていただきました。いろいろな方から、「読んでいますよ。皆さん頑張っているね」と声を掛けられては、胸が熱くなりました。毎回、紙面を通してさまざまなドラマが伝わってきました。そこには、地域の住民と卒業生やりが光を放ち、まさに医療の原点を見て取ることができましと、それにまつわる名言が織りた。皆、頑張っているなどの思いに誘われながら、二十八年前、

住民が主体の地域医療を



約3000人の卒業生が全国各地で地域医療に携わっている自治医大

私の最初の赴任地となった鳥取県の日南町へとたびたび思いをはせました。当時、小さな病院であった国民健康保険(国保)日南病院は、医師不足、経営困難の渦の中にありました。その中で、日南病院を守ろうと立ち上がった病院の職員の活動が、行政と住民を揺り動かし、町挙げての一大運動となりました。私が赴任して間もなくのことでした。

町づくりの土台

医療崩壊がささやかれる今日、それを乗り越え光り輝いている地域の様子が、下野新聞を通して読者の元へ届けられたと思います。課題山積のわが国の医療を、良き方向へと導く方策がこれらの地域の中にはぐまれています。

そこには、医療の本質である人と人との思いやりにあふれた心の交流と、それに裏付けられた医療が存在しています。そして、医療を通した暮らしやすい町づくりが進み、住民の充実感と町としての魅力の光が放たれています。全国の地域医療の充実こそが、わが国の医療を発展させる一番の近道です。

お互いに隣の人にそっと声を掛けてみてください。声にならなくても結構です。一声「ありがとう」と。今日からスタートです。

(おわり)

働いていますが、「Dr. ジチ」で紹介されたような地域医療が、全国の津々浦々で展開されているのです。

かじい 英治 自治医大地域医療学センター 地域医療学部門教授

日南町での取り組みは「Dr. ジチ」に登場した全国の地域の取り組みとまさに相通するものがあります。現在、約三千人の自治医科大卒業生が日本全国で